

べきものではなく、早急に解決し、確立しなければならぬ課題が山積しております。Soong先生をはじめとする台湾の仲間のエネルギーな活動ぶりを見て、思いを新たにしたいものです。その意味で、アジアの各地で頑張っている方々のお話を伺うことは大変意味深いものであります。

話はかわりますが、最近の銀行預金利率の低率化の影響をまともに受けて、国際交流基金から招待講演に使える予算が限りなく少額になってきております。このままの経済状況では、多分、招待講演は2年おきぐらいになりそうです。国際交流を活発にするためのアイデアと資金的なご協力を会員の皆様から募りたいと思います。どのような形でも結構ですから、この活動にふるってご参加下さい。

全体に関して(1)

小林隆児

大分大学教育学部

(現東海大学健康科学部設置準備室)

九州からはるか彼方の地までやってきた解放感と大の日本酒好きであったためか、学会の前日に新潟にやって来るなり、早速その夜には恩師と仲間と学会前夜祭をやってしまった。自分が所属しているいくつかの学会のなかでも一番強い所属感を持っている本学会に参加すると、ことのほかその解放感は強く、案の定深酒をやってしまった。後で聞いた話によると3人で2升平らげたそうである。前後不覚、また失敗をしかしてしまった。

しかし、幸い翌日のスケジュールは午前中フリーであったので、体力も回復し、症例検討には参加することができた。昨年と同様、小倉清コメンテーターの会場に参加した。5年前に症例検討に症例を提示した自分の姿を思い出しながら、他の会員はどのような思いをいだきながら報告しているかを、自分の経験とダブルさせながら聞き入るのが面白いのかもしれない。つい

小倉節に聞き入ってしまう。

症例検討のセッションは、たしかに他のセッションと比較すると、勉強になることが多い。でも、プレゼンテーターがあまりにも立派にまとめて報告したりすると、聴衆が期待するようなハプニングが起こることもなく、上品すぎてつい物足りないという身勝手なわがままを言いたくなってしまう。多少なりとも型破りな若手の報告の方が野次馬根性丸出しの筆者のような聴衆には興味がそそられる。その点からいうと、今回の症例検討は報告のまとまりのよさと質疑の際のそつのない対応が筆者にはやや不満の残るものであった。聴衆とは実に身勝手なものだと我ながらつくづく思うが、コメンテーターの切り口もいつもに比べて優しいな、と自らの体験を振り返ってひがんだりもした。小生が以前経験したようにプレゼンテーターがコメンテーターの質問におおろするような場面もなく、当時の自分の未熟さばかりを再認識するだけであった。

症例検討を充実したものにするにはさほど容易なことではないなと改めて思う。時間を追うごとにコメンテーターとプレゼンテーターの呼吸が次第に合って、いかにプレゼンテーターが心を裸にして自分を表現できるようになるか、そのような姿を引き出していくところがコメンテーターの腕の見せ所なのであろうか。こんなふうと考えていくと、いやはやコメンテーターは随分と大変な役割だと痛感する。野次馬でよかったとつくづく思ってしまう。

今年の学会は各演題の持ち時間を多くとるように配慮されていたことにより、6会場が同時に進行されることになった。会場も県民会館とメルパルクに分かれ、両者の物理的距離もかなりあったので、気軽には移動できず、結局、筆者が参加できたのは、1日目が「発達とその障害」「自閉症」、2日目が「招待講演」、あとは会長講演、シンポジウム、記念講演というものであった。

聞いてみたい発表も少なくなかったのだが、そのほとんどは聞くことができなかつた。学会

運営は実に難しいものだ。90題近くの演題を実質2日間で消化しようと思えば、今回の方法のように多会場方式にして各演題にたっぷり時間をとるか、少会場方式で各演題を短時間でやってしまうか、二者択一になってしまう。このようなジレンマから脱皮するには、採用演題を精選するしか方法はない。でも本学会はそれを行う段階にはまだ到達していないのであろう。当分は会長の裁量でどちらかの方法を模索していくしかないのかもしれない。

それにしても毎度のことながら、学会発表の際の心得として認識しておくべき事柄を一切無視しているかのような発表がいくつかみられた。発表開始時間を忘れて、前置きばかり長々としゃべり、肝心の研究データはスライドに細々と記すだけで、まるで聴衆には見えないようにしているのではないかと勘繰ってみたいような発表にいくつか遭遇したのには驚くとともに、聴衆に対する思いやりのなさを感じて発表者の意図に疑問を抱いてしまう。

10数年前に本学会で筆者が発表した当時を考えるとあまり他人のことを言える立場ではないかもしれないが、学会発表については当時在籍していた大学では実に厳しい指導を受けたのを思い出す。発表時間の厳守はもちろんのこと、発表論文の構成、スライドの内容、書き方、作り方などに至るまで細かな指導を執拗に受けたものである。もちろん予行演習は必ず行われ、質疑の模擬演習まで行っていた。このような経験は今日考えてみると大変貴重な財産となっているのを痛感するが、数人の話を聞いてみると、予行演習などあまり一般的には行われていないらしい。いわんやスライドのチェックを受けることなど珍しいのかもしれない。

自分の発表が聴衆に十分に伝わるような努力をもっと行ってほしいと思わざるをえない発表はまだまだ多いように思う。医師のsocial skillの一つとして学会発表技術の習得にもう少し心を砕いて欲しいと自らの体験を振り返ってみて痛感するのである。学生の指導に次第に多くの時間を割くようになってきたためか、学会に参

加してもどうしてもつい学生指導の立場から抜け出せない自分に気づいてしまった。学会全体を通して印象を述べよとの宿題にこのようなお粗末な内容の印象記しか書けなかったことをお許し願いたい。

学会の終了後、佐渡に単身で渡り、観光を済ませ、九州に帰る日の朝、新潟市内の市場で買って帰った「たらばがに」と「いくら」の新鮮な美味を家族みんなで賞味して、つくづく新潟に行つてよかったと心底思った次第である。感謝。

全体に関して(2)

牛島定信・氏原鉄郎

東京慈恵会医科大学精神科

第34回日本児童青年精神医学会は、1993年10月21～23日の3日間にわたり、新潟県立療養所悠久荘増村幹夫会長の下で開催された。シンポジウム、会長講演、特別講演、招待講演、症例検討会、委員会セミナーの他一般演題37題で、9会場というかなり大掛かりな総会となった。お世話いただいた増村会長、柴田事務局長の隅々にまで行き届いたご配慮のお陰で、参会者一同、新潟の秋色のなかで存分に子どもたちの心の問題に集中できたことに感謝の意を表したいと思う。

本総会で新しい試みは、教育に関する委員会主催の《養護教諭と学校精神保健》をテーマにしたセミナーが開催されたことであろう。主催者のひとりであるので我田引水の嫌いはあるが、この企画はクリーンヒットであったと言える。養護教諭の卒前教育の複雑さ、山積する現場の諸問題、卒後教育の難しさなどが北村委員を中心に委員会で討議され、現場の生の声を聞く必要があるの結論に達したことが試みの踏み台としてあった。清水委員と安田道子氏（愛知教育大）の司会で、北村委員に氏のこれまでの調査その他の資料に基づいた基調講演をいただき、大阪の徳山美智子氏、新潟の宮島信子氏に